フォトエッセイ②

海の博物誌

出羽島・津島・大島

牟岐町の沖合いにポッカリ浮かぶ３つの島。牟岐港から連絡船で約１５分のところにある出羽島は、３島のうち唯一、人が生活している島です。島のぐるりには遊歩道が設けられており、潮騒を聞きながらの散歩は気持ちをリフレッシュさせてくれます。途中、島の南には出羽島灯台があり、東に紀伊半島、南西に室戸、南に太平洋、北に四国山地の大パノラマが開けています。

大島は周囲が十数キロにおよぶ最も大きな島で、強い陽光のもと、照葉樹林が生い茂っています。暖かい黒潮の流れ、点在する無数の岩礁、冬でも霜知らずの太陽の島で、イシダイ、グレ、イサギ、アイ等・・・好環境に生息する魚種はじつに豊富。津島とともに磯釣、船釣のメッカとして県内外から大勢の釣りファンが訪れています。また、大島港の奥深くには、土佐の豪族の美しいお姫様の悲恋物語にまつわる奇岩“姫神”があり、毎年８月には“姫神まつり”が盛大に行われています。

津島には国の天然記念物であるシイの自然林があるほか、アコウやオオムラサキシキブ、シラタマカズラなど暖地性の珍しい植物群落が見られます。また、大島同様釣りの好適地として有名で、四季を通じていろいろな魚種で釣りが楽しめます。さらに、大島・津島周辺は海中公園に指定されており、色とりどりのサンゴや熱帯魚を見ることができます。

フォトエッセイ③

知の博物誌

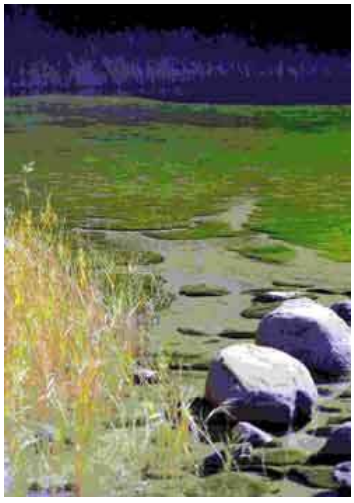
亜熱帯植物の宝庫

牟岐町の３つの島は、黒潮の影響で年平均気温が１７℃を超え、県内では最も暖かく、そこには内陸では見られない亜熱帯植物が繁茂しています。なかでもその存在価値が学術的にも高いいくつかの動・植物が国と県の天然記念物に指定されています。

その１つが出羽島大池に自生する「シラタマモ」で、仮根部に白色の小球体をつけることからこの名がついています。今からおよそ１億４千万年前に繁殖した植物で、海水から淡水へと移行する途中の形質を示すもので「生きた化石」ともいわれています。現在では、アフリカのリビア海岸、インド洋上のモーリシャス島、南太平洋のニューカレドニア島と日本では出羽島に自生する貴重なもので、国指定となっています。

津島は、島全体がシイの巨木を中心にヤマモガシ、コバンモチ、ミミズバイ、カクレミノなどの常緑広葉樹林で覆われ、その林下にはアオノクロマタケラン、シラタマカズラ、ホンゴソウなどの珍しい植物が繁茂し、自然の姿がそのまま残されているので、「津島暖地性植物群落」として国指定となっています。

また、大島のタチバナは、日本に自生する唯一のミカンで、本州、四国から沖縄、台湾に分布していますが、その分布は少なく、県内ではその自生が確認されたのは昭和２６年のことで大島のものが最も古く、県指定となっています。

ナギは神社に献木されますが、自生のものは少なく、町内喜来川上流の３０余本の自生地が県指定となっています。

動物では大島のアオサギのコロニーが県指定となっていてその保護が図られています。